

Marriage in Britain

(英国の結婚について)

森 慶太郎

はじめに

本大学で女子学生に英語を教えてから4年目になります。彼女達の顔を見る度に、結婚のことが頭に浮びます。今日は英国の結婚のことについて次に掲げる文献を中心に述べて見たいと思います。

Tregidgo: A Background to English 参考文献 (トレジッドゴ: 英国と英国人——英光社)

話をすすめる前にThe United Kingdom, (Great) Britain, England について若干述べておきたいと思います。英国の正式の名称はThe United Kingdom (of Great Britain and Northern Ireland) であります。Great Britain は東側の大きな島で、England はGreat Britain の一部で、Scotland や Wales と対比して言われるものであります。併し England は英国の中では一番大きく、人口も多く、一般的には一番豊かな地方と言えます。従って England と English を Britain と British の意に用いがちであります。

さて本論にはいりましょう。

'family' という語は普通には father, mother, and their children living together (一緒に生活している両親とその子供達) という意味であります。従って結婚ということは、各自が親から独立して新しい生活にはいることであり、夫の方が経済生活を支え、妻の方は家のきりもりをし、子供達については彼等自身が直接責任を持ち、外の誰もそれに干渉する権利を持たないのであります。

さて結婚についてであります。その前に Jane Austen (ジェイン・オースティン) の 'Pride and Prejudice' (自負と偏見) の冒頭の文を掲げてみましょう。なかなか含蓄のある素晴らしい文であります。

"It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune must be in want of a wife. However little known the feelings or views of such a man may be on his first entering a neighborhood, this truth is so well fixed in the minds of the surrounding families that he is considered as the rightful property of some one or other of their daughters."

(財産のある独身の男が細君をほしがっているということは、世間一般に認められている真理であります。近所に移転してきたばかりの時に、そういう男の気持や考えは全然分らないとしても、この真理は近所のどの家族の心の中にもちゃんと決っていて、当然どの娘かの所有物になると考えられています。(世界文学大系・中野好夫訳参考)

上文を読んで分るように、独身の男であれ、女であれ、一人で居られる筈はないと決めてかかるのが世間の常識で、たとえ現在一人で居ても、いつかは誰かと結婚するというのが極めて普通のことです。

ジェイン・オースティン(1755—1817)の時代は今から150年も前のことであるから結婚のありかたは現在とは可成り違ったものであります。

即ち独身の女性の両親が責任を以て娘に適当な男性を見つけてやるのであって、それまでは彼女は親の家で保護され、養われているのであります。結婚の話がまとまると娘に財産の分け前としてdowry(持参金)を持たせるのもどこかの国とよく似ています。

恋愛 現代の英国の結婚は恋愛以外には考えられないというのが現代英国人の考えのようであります。

ただし恋愛と言っても、最初の愛情が次第に成長して永続的なものになり、長い結婚生活の間にはいろいろの出来事が起り、お互の気持も変ったりしながらも、終生お互に愛し合って、お互に忠実に生きてゆくようになる。これが本当の愛情だということをも彼等は又十分に知っています。オースティンの時代の独身の女性は親の保護のもとに生活し、男性と二人だけでおるなどは夢にも考えられなかったが、時代も変り風俗も変り、彼女達は親の厳重な保護のもとにあることがなくなって、好きなことが自由に出来るようになり恋愛も自由になり、特にアメリカ映画の影響もあってkissやembraceが当然のようになっていきます。併しそういう時代になっても、ただ一つだけ変わらないものがあります。即ちそれは結婚以前に母親となることを大変恥と考えることであります。従って立派な独身女性はある男性と恋愛におちて、ある時にはembraceやkissを許しながらもそれ以上のことはさし控えるようにしており、又立派な男性はそういうことを求めないのであります。

結婚準備期と婚約 独身女性が学校を出て就職するということが大事な点で、就職と同時に今までにない新しい自由を得、又更に大きな独立を得ることになります。彼女がいろいろな男性に会うのは例えば職場とか、ダンスの会とか、クラブとかであります。二人だけで出かけたり、グループで出かけたりします。映画に、ダンスに、散歩に、そして旅行に。費用は主として男性持ちであります。そして彼女がある男性を好きになると、自分の両親に会わせるために家に招くことになります。こんなことをしているうちに両親がその青年を好ましいと思うようになったり、又彼女の彼に対する気持ちははっきりしてきて、結婚しようかという決心をするようになります。男性が女性を自分の家に招く場合も同様であります。

ただ大切なことは現代の英国の親達は昔のように子供の結婚に自分の権威を振り廻すことは減多にないのであります。ただ親の知りたいことは自分の娘が今どこで誰と会っているのか、そしてまたたとえば夜の10時には必ず帰ってくるということでもあります。

一晩外泊したような場合は必ず両親と悶着が起るのであります。併し最後の決定はあくまでも若い男女にあるのであります。ただし自分で決定出来る年齢になっていることが必要であるのは勿論のことです。

1. 16才未満は結婚出来ない
2. 21才以上は両親の承諾は不要である
3. 16才～21才は両親の承諾が必要である

いずれにしても結婚しようという約束が若い男女の間でなされ、夫々別に又は一緒に両親にその旨を告げ、許可を得る形をとりながら、実は両親に喜んでもらうという形でなされます。

結婚準備期から結婚に到るまでにはまず propose (結婚の申し込みをする) が必要です。男性が女性に propose する。正に大事な一瞬であります。It is a great moment for both of them, と上述の本に書かれています。女性の方が 'Yes' という婚約したことになります。即ち 'They have become engaged' ということになります。男性がどんな風に propose するかを仮定してみましょう。

やはり上述の本から引用します。

"Joan Stevens is twenty years old. Since leaving school, she has had several boy friends. But eighteen months ago she met Harry Laker, who is twenty-four, and they have been 'going steady' ever since. For several months each has been a welcome visitor at the home of the other. One evening, Harry has had supper in Joan's home. After supper, Joan's parents go to bed, and she is left alone with Harry, visiting next to him on the settee in front of a fire. Perhaps they have talked vaguely of marriage before. But now Harry "proposes" properly.

※go steady 確実に相手とデートを続ける。

properly 正式に

若しこの場合女性が 'No' と言えば、それで万事終りということになる。

'Propose' の場合実際にどんな言葉を使うのかを調べてみましょう。「井上義昌編：英米風物資料辞典」によると次のように書いてあります。

「きわめて率直に "Will you be my wife?" と切り出すべきである。相手は 'Yes' とか 'No' で答えるはずである。この重大な試煉を経るには余りにも内気なはにかみ者は自然その時機を逸し一生独身で終ることになる。」

さて婚約が成立すると engagement ring を男性から女性に渡し、彼女の左手の third finger 即ち ring finger (薬指) に入れることになります。ring が入れられるということは結婚の意思を公に宣言することであり、他の男性を失望させることになります。結婚は割合に早く行われるようであります。

そしてその間に女性の方が変心すれば ring を返却することになるのは勿論であります。

高松短期大学研究紀要

第 6 号

昭和 51 年 3 月 1 日印刷

昭和 51 年 3 月 10 日発行

編集発行 高松短期大学
〒761-01 高松市春日町 960

印刷 新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158